

わたしの皮膚感覚的“憲法論”

中島三晶（2016年5月執筆）

■はじめに

“戦争が終わって僕等は生れた 戦争を知らずに僕等は育った おとなになって歩き始める 平和の歌をくちずさみながら 僕等の名前を覚えてほしい 戦争を知らない子供たちさ”…大学出たのころ「戦争を知らない子どもたち」（作詞：北山修、作曲：杉田二郎）をよく歌った。他愛のない詞だが「戦争はやめようよ」がヒシヒシと伝わる“反戦歌”、若者からのメッセージとして能天気には歌っていた。が、この歌を「戦争なんて考えなくてよいのだ」と批判的に聴いたと一世代後の人に指摘され「エーッ！」と絶句、これが世代間のギャップかと痛感させられた。でも、この数年で戦争とか憲法でこんなに燃えあがる時がくるなんて想像もできなかった、と一致した。

9.11以降、アフガニスタン、イラク、シリアそしてIS等々、世界は混乱・混沌の中にある。いまレームダックのオバマ大統領誕

生は2009年、その後すぐ鳩山政権が生まれ消え、そのころは“理想”という言葉がまだすこし残っていた。2016年のいま、世界・日本は、わずか7年後なのに、なんと様変わりしたことか。日本で、憲法がこれほど論議を巻き起こすと、誰が予測できたか。2012年再登場の安倍政権は明治の御世への先祖返りを企み、軍国への道をあゆもうと“自民党日本国憲法改正草案”の悪乗りまでし始めるとは…。ならばわれわれは話の原点を“日本国憲法”に戻すこと、憲法が“押しつけ”というのなら、“天皇制”“9条”“沖縄”も押しつけ、そこから論議を始めるべきではないか。都合の悪いことには頬っかむりの安倍政権の手前勝手さは許されない。

“戦争と憲法”こんな身近で大事な話を、学者・報道・国会だけにまかせてはいけない。われわれ自身がいつも皮膚で感じていることを、みんなで生身の論議することが重要だ。この数年の間に立憲主義を覚醒させてくれた安倍政権に、感謝のお礼参りをしようじゃないか。Red Cardを安倍のオデコに叩きつけ、即退場させようじゃないか。われわれに与えられたRed Cardはただ1枚“選挙に勝つ”しかない。

■真空地帯 Mac と天皇の会談記録

敗戦宣言＝ポツダム宣言受諾から日本は“戦後”にはいった。戦後の流れを作ったのは、やはり米国側ボス：マッカーサー（Mac）と日本側代表：昭和天皇（天皇）の二人だとわたしは考える。戦争終結・戦後処理の文献は多く残されているが、肝腎要の記録がないから、なにを読んでも隔靴搔痒感しかのこらない。その肝腎要の記録とは“Mac と天皇の会見録・会談録”である。ぽっかりと空いたこの空間が埋まらなないとホントのことはなにも見えてこない。

Mac と天皇は1945年9月27日に初会見をして以後、Mac が更迭帰国する1951年4月の前日まで11回会談している。初回の会見時Mac は連合軍最高司令官、天皇は日本の元大元帥であるから、共に戦争当事者のトップ＝総帥であった。と同時に、共にその後の日本の行く末を主導する総代表でもあったのである。迂闊なことだが“天皇は大元帥”と、わたしが知ったのはつい最近、そうかそういうことだったのか、であった。11回の極秘会談でなにが語られ・なにが決められたか、いまは推測するしかない。天皇は陵の中に持って行き、残された記録は周りの者が都合の好いところだけしか伝えていない。Mac は占領政策に利用できる場所を使い、回想録の記録もこと天皇に関する部分は信じがたい。報告文書は米国のどこかに残っているのかもしれない

いが、70年後のいまも出てこないのではこれからも無理だろう。結局はすべてが推論の域を出ないのだが、それだけにかえて想像たくましくなる。双方の総帥が何度も挨拶と機嫌伺いを繰り返すことはありえない、二人だけの決め事があったに違いない、ということだ。

■わたしの原点

11回の会見→会談の中身は“取引”であったろう。“取引”とは不穏な表現だが「双方合意のもとに事柄をやりとりする」くらいの語感だ。合意したのは、1. 国体の維持、2. 戦争放棄の憲法9条、3. 沖縄の切り離し、の3つである。

Macのこの時の立場は、連合国軍最高司令官ではなく、米国の国益と自分の価値最大化を図り“大統領への道”を描いた野心家であったろう。第2次大戦の終わりは冷戦のはじまり、つぎは共産主義国・ソ連との覇権争いであること誰にも分かっている。沖縄には不幸なことだが、太平洋の要に位置する沖縄を何がなんでも自由に扱いたい。そのためには空襲・沖縄・広島・長崎で完膚なきまでに壊した日本を米国側に有利につかせる、がMacの考えだ。そのためには神国日本の柱・天皇制の維持…くらいは誰でも思いつく。戦争終結の交渉時でも“国体維持がイの一番の日本”は重々承知済み。どちらが言い出したか、日本の戦争放棄は願ってもないことだ。それに特攻とか人間魚雷とかの“人間無視”兵器を考える国に軍隊など持たすこと、ヤバくて絶対にさせてはならない。

天皇の立場は、ひたすら国体護持、天皇家存続ではなかったか。当時の臣民のことまで頭が回っていたか？ 文献では、戦争終結には米国に一撃を加えてから交渉の席につくが天皇の考えであったようだ。ところが、本土は空襲・沖縄・広島・長崎とメチャメチャとなつては、それは絵に描いた餅にしか過ぎなかった。天皇の周りの軍人・宮中人たちは“知ってて言わず”の無責任の極みとなっていた。すくなくも1500年は続いている天皇家の血筋を自分の代で終わらすわけにはいかない、ご先祖様への面目が…いつも頭をよぎる。お家を存続できるなら、Macの言うことをなんでも聞こう。勝者と敗者のちがいはあっても、腹を括って話せば通じるかもしれない。日本が共産主義国になつてはMacも立場がないだろう、ここに一筋の活路がある。Macもまた交渉相手を天皇ひとりにしたかった、すべてが効率よく効果的にコトがはこべるからだ。

こうしてMacと天皇との極秘会談がはじまり、天皇家・天皇制は維持され、そのかわり戦争放棄の憲法9条が生まれ、そして沖縄は日本から切り離す、が決められた。日本国民には憲法9条はまさに恩寵、戦争が終わってのホッと感と明るさ感で、みんなは希望を持つことができた。しかし沖縄の人にしてみれば、切り離しは“切り捨て”以外の何ものでもなく、日本政府による2度目の“琉球処分”、しかも天皇も加担していたと怒り露わにする、この後じっさいに軍事的植民地化の道を辿ることになる。われわれはこの沖縄切り捨ての上に太平楽に暮らしていること肝に銘じなければならない。

わたしの天皇制・憲法・沖縄にたいする意識の原点はここらあたりにある。

■天皇はなぜ沖縄に巡幸しなかったのか

“人間天皇”をアピールするためと言われる天皇の地方巡幸は、1946年～1951年に北海道と沖縄を除いて日本を一巡している。わたしの感覚では、戦争で大苦勞を掛けた沖縄に一番に行き「苦勞を掛けたな」と一言でも述べていれば…とおもうのだが…。なぜ沖縄には行かなかったのか。

衝撃的な記事が1979年岩波の『世界』に掲載された。筑波大学の教授が「天皇が沖縄の分離

についてなんらかの関与があったのでは…」と書いた、いわゆる天皇メッセージだ。この文書は米国国立文書館にあることが確認され、沖縄公文書館が公開している。この文書は天皇の相談役・寺崎を通じてMacと米国国務長官宛てに1947年9月に出したものだ。元の沖縄県知事・太田昌秀は講演『戦後沖縄の挑戦』でメッセージの内容をこう受けとめている。

「米国が沖縄その他の琉球諸島の軍事占領を継続するように天皇が希望していると、言明した。そのような占領は、米国に役立ち、また、日本に保護を与えることになる。天皇は、そのような措置は、ロシアの脅威ばかりでなく、占領終結後に、右翼および左翼勢力が増大して、ロシアが日本に内政干渉する根拠に利用できるような“事件”を引き起こすことを恐れている日本国民のあいだで広く賛同を得ると思っている。」「沖縄（および必要とされる他の島々）に対する米国の軍事占領は、日本に主権を残したままでの長期租借—25年ないし50年、あるいはそれ以上の擬制にもとづくべきであると考えている。天皇によると、このような占領方法は、米国が琉球諸島にたいして永続的野心をもたないことを日本国民に納得させ、また、これより他の諸国、とくにソ連と中国が同様の権利を要求するのを阻止するだろう」

太田の講演は元号が平成になってからのもの、だからやっと話せたのだろう。興味深いのは、『天皇メッセージ』の根底にある沖縄についての見方・考え方、すなわち天皇や政府首脳が沖縄を日本固有の領土と見なしていたか否か、ということ、私の判断では、答えは“否”です」の太田の明確な表現だ。ひらたく言えば、天皇は沖縄のことなど、これっぽっちも考えていなかったよ、ということ、沖縄の人なら“怒髪天を衝く”ことではないか。Macと天皇は沖縄の“処理”について深く話し込んでいたと想う。こんな話をしといて沖縄巡幸、そりゃあできない。行くとすれば、Mac日本上陸前の1ヵ月、それを具申する股肱の臣・宮中人はいなかったのか。

■沖縄の人の気持ち

臣民から国民になったわれわれは、とにかく生きること必死、沖縄のことを想うことはなかった。60年～70年代沖縄基地問題で本土の学生は大いに討論・行動したが、“日本に留学＝日留”していた沖縄人学生には“なんか、どこか、ちがうよ”の感覚だったと聞く。やっぱり沖縄の本質問題を理解していなかったのだろう。沖縄の同世代人の高良倉吉が、その“なんか、どこか、ちがうよ”の感覚について10年前に書いている。

「私の場合は、1967年から73年までの6年間、愛知県と京都府の大学で学んだ。中国で文化大革命が起こり、ベトナム戦争は泥沼化の様相を深め、全国で『大学闘争』が吹き荒れた時代である。そして、その時代は『沖縄返還問題』が耳目をあつめた時機でもあった。…二、三度政治集会に参加したことはあるが、私は政治的な活動に対して意識的に距離を置いていた。…正直に告白すれば、6年間の学生生活において、私が帯びた深い感情は、ヤマト（沖縄以外の日本）という土地の『今』に対する強い不調和感だった。ここには沖縄に共鳴できる意思が薄く、文化大革命やベトナム戦争、『大学闘争』など同系列の問題としての『沖縄返還問題』しかない、という不信感である。そのような『問題』群に傾斜する政治状況に対しては、感情的な距離を置くしかなかった」

沖縄の人たちの“この感覚”は10年後のいまもほとんどかわっていないと想う。

■日米地位協定と日米同盟について

“この感覚”は沖縄に住む人たちだけではなく、本土の米軍基地が今在る、または、昔在った地の人たちの感覚にも通じている。知人の防衛大学の先生が横須賀を案内してくれて「植民地で

すよ、ここは」と吐き捨てた。サンフランシスコ条約で日本は独立し、沖縄は切り捨てられ、安保条約が結ばれ、それに基づいて日米行政協定が締結され今日まで地位協定として続いている。同じ敗戦国のドイツだって20年も前の1993年に大幅に改定されている。このままでは、日本は米国の植民地・属国・51番目の州と言われ続ける、これからもこれでいいのか、の問いかけなのだ。

また沖縄でムゴイ事件が起きた。いま日本で起きている米国駐留基地の事件・紛争・問題のほとんどは日米地位協定が“元凶”だ。それを沖縄が一身に被っている。沖縄に“人権”はなく、事は米国・米軍の論理ではこぼれ、“謝罪”“再犯防止”とうやむやに済まされてしまう。この悔しさ、わたしは到底解りえない。問題解決のフリをしているだけの日本政府が「唯一の対策は…」などと言うこと、ちゃんちゃらおかしく、沖縄の人ならずオレだって聞く耳持てない。「日米地位協定を変えたら聞いてやる、出直してこい！」が偽らざる心境だと思う。

安倍は“日米同盟”があるから日本は安全なのだ、沖縄に同盟米軍がいるから安全なのだと呼んでいる。でも“同盟”ほどいい加減な言葉はない。世界の歴史で同盟が守られた例(ためし)はあるか、まったくないと言ってよい、それほど薄っぺらなものなのだ。“同盟”は軍事外交用語、こんなもの信じる方がおかしい。軍隊国家間に“信頼”ということありえないのだ。

そして聞きたい、大戦後の70年間、米国・米軍のおかげで世界は平和に向かったか。ベトナム、アフガニスタン、イラクそしてIS等、大混乱の根っこはすべて米国に起因している。世界の保安官を自認する米国が問題を起こし“解決”に奔走する、これを“マッチ・ポンプ”という。米国の行動原理はただ一つ、米国の“国益”だけ、“国益ビジネス”を求め世界中に出張しているだけだ。日本が思うほど米国は日本のことなど思っていない。それが日米同盟の現実なのだ。

■気色悪い自民党日本国憲法改正草案

独立国日本なのだから“自前の憲法を”と出てきたのが自民党日本国憲法改正草案、ともかく読んでみた。“とっても気色悪い”が最初のご感想、で、思いだすのが日本国憲法つくりのときのエピソード。“新生日本の新憲法を”ということで日本中に憲法論議がおこり、幣原内閣も動き始めた。草案つくりは国務大臣・松本丞治がしきる憲法問題調査委員会、ただし委員会とは名ばかり、すべて松本の頭の中を憲法にしようとするだけの集まりだった。松本は当時考えられる最高の法律の第一人者、このことは誰も認めるところ、しかも大変な自信家「Macに日本の心と魂の憲法を見せてやる」と一人頭をフル回転させた。しかしいかんせん松本は68歳、明治の御代に育った人間、ものの考えには限界がある。できたものは古臭く黴びたもの、もちろん天皇御為の憲法だ。これを知ったMacはあまりの中身に激怒(したはず…)、すぐGHQのなかに憲法草案作成の作業班をつくらせた。メンバーは20代初め～40代半ばの24人、軍人ではあるが法律家も多く、GHQにこもって1週間、日本国内の民間案を大いに参考にし、アメリカ流侃侃諤諤の議論の中で産声をあげさせた。「東大式ひとり頭脳」vs「ハーバード流白熱教室」のちがいが、結果は見えている。なぜこんな話か、自民党日本国憲法改正草案はつくり方も出来も70年前の松本草案とおなじか、それ以下だと言うことだ。巧妙に字面を変え、“お国のために”の復活を狙っているだけ、反動憲法と言うしかない代物だ。

自民党の結成理念は憲法改正！と叫び、ただくつついてゆく輩たちよ、時代錯誤と言わずしてなんなのか。戦時の天皇制・徴兵制等の暗黒の時代が遠くになって生まれた君ら、自分がどこにもないバカな言動、情けない。そもそも自民党草案の目指す先は何なのか、解っているか、納得しているのか。上から下まで日本の母国語を満足に読み書きできない自民党の君ら、若手弁護士

が自民党バカ草案を英訳してくれた、ぜひ読んでみる。米国議会で日本語のルビをふった文書を読んでいると、カンペしながら読むのとは違う、知的な作業だ。憲法は国民のためだけではない、世界に日本の向かうところを示すメッセージなのだ。自分たちの草案を理解も説明もできない君ら、政治の世界に居場所はなく居る意味もない。消えよ！それがお国のためというものだ。

■軍隊・自衛隊への幻想を捨てよう

軍隊はなにを守ってきたか。軍隊というもの自分と自分の組織を守る機能しかないこと、世界を見渡せばだれでも分かる。先の大戦では天皇家と天皇制に巢食う輩…職業軍人も含めて…を守っただけだ。国民は守られたか、まったくない、空襲・「満洲」・沖縄・広島・長崎、ただただ無駄死を強いられただけだ。

では自衛隊はどうか。何十年かけてアホな幕僚長一人しか作れなかったではないか。なににより自衛隊がいつか国民に銃を向けるかもしれない…それが心配。杞憂ではない、60年安保のとき、ときの岸首相は…この人の血が安倍首相に流れているが…自衛隊出動の要請を決意、周りに自国民に銃を向けるとはと諫められ、やめたという事実。いまの日本は戦争の記憶がほとんど薄れているだけに、60年安保より取り巻く状況はヤバイと思う。なんせ国のトップは、戦争・戦場のリアリティのない言葉だけの独りよがり権力者なのだ。胃痛を薬物でコントロールしているトップにいただくこと、まさに恐怖の極みだ。なににせよ、軍隊がないことが一番、自分の命と暮らしは自分で守るしかない。

70年間日本に戦争がなかったこと、憲法9条による非武装が最高の戦争防止策だったことは間違いない。その9条のもとで太平楽に育ってきたわたし自身が平和ボケになっていた。が、考えれば考えるほど、これからも武器・軍事を持たずに丸腰・素手でやっていこうよ、になってゆく。いままでの歴史を振り返り、軍事・軍隊でものごとが解決したことがあるか？ まったくない、抑止力（みょうな言葉）にもなっていない。軍事・軍隊は紛争・問題を起こすだけの存在なのだ。国家は自国内の状況がヤバイときに国民の目を他国に逸らせようと煽る、軍事・軍隊はその道具に使われるだけの存在だ。

■現実的丸腰論を考える

丸腰論を考えると一番大切なことは、わたしたち、個人、一人ひとりの“命と暮らし”がきちんと守られるか、どうかということである。軍隊と米国に頼ることなくわれわれはやっていけるのか、ということだ。

そもそも日本という国、資源と財産は人だけ、わたしたちの命と日常の暮らしは、外国の資源なしには一日たりともやってゆけない。このことは明治の昔からそう、そしてこれからもそうなのである。自分の暮らしを守るのに、隣国・他国とケンカ腰でやることはない、仲良が一番いいが、丸腰ならせいぜい口ケンカ、無駄死はない。どこの国だって何の資源のない日本を相手に戦争し、勝っても取るものがなきゃあ、戦争する意味はない。お互いなんの益もないことするのほどヒマな国は世界中どこにもないのだ。

わたしの“丸腰”の感覚のはじめは“憲法”とおなじ、もの心ついたとき“憲法では軍隊も戦争もない国”が当りまえで、ずうっとやってきた。いま思えばすでに自衛隊があったのだから、迂闊といえは迂闊な話ではある。しかし、いまは違う。政権・自民党が騒げば騒ぐほど、ヤッパ日本は丸腰でこそ世界と“差し”でやっていける、自分の命と暮らしを守るには丸腰が一番現実的、これしかない、と確信を深める。日本は丸腰でどう闘うか、みんなで知恵を出し合い、“し

なやかにしたたか”にやるしかない。このまま軍隊がなし崩しに出張ることが愚策の骨頂、阻止しなくてはならない。

■丸腰は“やられっぱなし”になるか

やられたらどうする？ 軍隊がなくて大丈夫？ 軍隊があろうとなかろうと“やられるときはやられる、初めは…”が“世界は黙っていない、日本が国際社会と普段から真っ当なつきあいをしていれば…”と考える。わたしはケンカがとてつもないが何とかやってこれた。ケンカの腕も力も強いダチは言う「本当にコワイヤツは丸腰で“殺されてもかまわない”と向かってきたとき」。この言葉が支えだ。戦争は国家間のケンカ、子どものケンカと本質は同じ、立ち向かう本気度が帰趨を決める。弱腰とはまったく違う、丸腰には自身の勇気と覚悟が求められる。こんな大事を他人にまかしてはならない。“やるときはやる”のだ。

80年前と同じ轍を踏んではならない、軍事・軍隊に頼るのは“猿が喰う”夢想論でいどのものでしかない。強く自立した国民が多いほど強い国家になれる。強い国家は、人権…とくに言論の自由…を守る憲法がしっかりしている。われわれは自分自身で強くなるしかない、国家は強い個人を望まないからだ。9条のためだけでなく国民一人ひとりが自立し強く立ち向かえることにお金の掛けるのだ。軍事・軍隊に金を費やすなど愚の愚でしかない。日本にとって9条を守ること、守っている様を世界に伝え、世界の世論を動かすこと、これこそが最高の防衛策なのである。

■世界平和への貢献とは

積極的平和主義、こんな意味不明なことをよく言えるもの、安倍首相、恥ずかしくないか。武器購入にしかお金を使わない国に気前よく援助したり、難民の一人も救えずに逃げたり、真実を伝えるジャーナリストを見殺しにしたり、よく言えるものだ。そんなに積極的に平和に貢献したいのなら、まずはテメエが現地・現場に出張ったらどうだ。

丸腰平和論のじっさいは、中村哲を中心とする「ペシャワール会」の活動がモデルになる。9.11米国の空爆で荒廃した大地だけが残ったアフガニスタン、内戦も追い打ちをかけ、人々は貧困に追いやられ、その中から“イスラムの原理に忠実”なタリバンも出てくる。現地に居た医師・中村哲は、“生きるには水が一番”と現地の人と井戸を掘り始める。その井戸も枯れ、中村哲は奥の河からの用水路建設を思い立ち、独学で土木を勉強、現地の人たちと共に石を積んでやっと完成させた。用水路に水が流れだしたときの現地パシュトゥンの人々の表情、涙なしにはみられない。もちろんすべてが順調ではなかった、タリバンに襲われ日本人隊員の犠牲者も出ている。それでも活動は続けている。参加する隊員は覚悟の上とはいえ悲しい出来事、ただただ二度と起きないことを祈るしかない。こういう活動が“世界平和に向けての国際貢献”のひとつなのだ。

■おわりに

皮膚の感覚とは感情的ということ、最後に「日本の国会議事堂前に大きな広場をつくれ」と言いたい。われわれ人間社会“生の声”が一番大切だ。国会前の広場に集まり・意見を交わし・デモをするということ、民主主義の基本中の基本、自由権＝抵抗権の根本なのに、日本にはない、世界にはどこにでもある、おかしくないか。それを条例とかなんとかで市民の通行を禁止する、ふざけるな。国会前で、若いも若きも、右も左も、ワイワイと9条を討論する、これがみんなの民主主義というものだ。これが正しく報道され、世界に伝わり、世界から Respect され、平和に

貢献できるのだ。

日米同盟をいたずらに振りかざし、バーチャルで無知蒙昧な安倍政権をストップさせること、これがわたしのリアリティな感覚なのだ。ウソつきで真っ当な話に通じない権力とわれわれはど
う闘うのか、ここまできると思考が堂々巡りをはじめ。丸腰で闘うには“デモと選挙”しかな
いのか、ほかに手だてはないものか、もどかしさを感じる。